# オック語の広い e, o のワレについて

# Diftogacion dels *e* e *o* dubèrts en occitan

多賀　吉隆

Yoshitaka TAGA

## 0. はじめに

本考の目的は、2つのオック語の方言におけるęǫのワレの分布の分析を通して、この2重母音化がどのように起ったかについての仮説を提示することである。[1]

ęǫの開音節における2重母音化は、Posner(1996: 158)によれば、紀元後2世紀から知られている。また、多くのロマンス語の方言で認めることができる。例えば、*lat.* pĕdem "足" > *fr.* pied、*esp.* pie、*it.* piede や、*lat.* potet "出来る" > *a.fr.* puet、*esp.* puede、*it.* può のようにである。[2]しかし、*oc.* pè、*cat.* peu、*port.* pé や *oc.* pòt、*cat.* pot のようにワレを起さない方言もある。このような例から、一般にはオック語は2重母音化を起さない方言に分類されている。

そのようなオック語を利用する理由は次の2つである。

第一の理由は、オック語は音型と方言によって、もとの開音節においてもワレを起すことがあることである。例えば、多くのラングドック方言で、*lat.* bovem "うし" > buòu や *lat.* focum "炉" > fuòc "火"、*lat.* podium "さじき" > puèg "丘" のように2重母音化する。

また、閉音節において、オック語はカステリア語と異なり、ワレを起さない。[3]*lat.* pellem "皮膚" > *oc.* pèl ≠ *esp.* piel、*lat.* mollem "柔らかい" > *oc.* mòl ≠ *esp.* muelle のようにである。しかし、硬口蓋音の前ではこれが逆になる。例えば、*lat.* oculum > oclu > *uèlh* ≠ *esp.* ojo のようにである。

第二の理由は、既に挙げた例から分るように、オック語でǫのワレが起る場合に、2通りの形が現われることである。つまり、ŏ > /wǫ/ となる buòu のような形、ŏ > /wę/ となる puèg のような形があることである。これに対してイタリア語では /wǫ/ 、カステリア語では /wę/ やそれらから派生した形がもっぱら現われる。

さて、資料としては、主に現代語の辞書、Lagarde(1991a)、Lagarde(1991b) と Fourvière(1975) を使う。前2者は、ラングドック方言についてのもので、オード(Aude)県のある村(Rivel) の方言を記述したものである。後者は、プロヴァンス方言のローヌ河岸の方言を記述したものである。いずれの辞書も比較的狭い地域の方言を用いている。

現代語の辞書を資料とすることには、次のような疑念が生じるであろう。

辞書を作る場合には、いくつかの形からの選択と、選択された語形の表記に規範意識による偏向が掛るのではないか、と。

しかし、語形の選択は他の資料を使う場合でも、被調査者・調査者の規範意識による偏向は排除することはできない。また、表記についての規範意識から、例えば、è とのみ書かれていても、2重母音でないかという疑念については、オック語において、/jẹ/ と /ẹ/ は、fièr "尊大な" と fèr "野生の" のような対を持ち、[4]表記で区別されている場合に違いがあると考えざるをえない。ò については、Lafont(1983: 29) によれば、確かに多くの方言で [wǫ] ~ [wẹ] ~ [wa] のように実現されているが、本考で利用する辞書では、オキシタニストの正書法で buòu と書くのされる語を、原則としてその書法を使う Lagarde(1991a) でもフェリブリージュの正書法による Fourvière(1975) でも、biòu と表記されているため、あまり問題にはなりえない。

## 1. 音型による分布

### 1.1 記述する方言の特色

実際に分布の記述に入る前に標準的なオック語(occitan référentiel) と記述する方言の違いで、ここで扱う問題と関係することを挙げておく。

#### 1.1.1 Rivel の方言

Rivel の方言については、主に Lagarde(1991a: 12-14) の記述による。

Rivel の方言は、ラングドック方言の下位方言であり、中央ラングドック方言に近いが、ガスコーニュ方言やカタルニア語に近い面も持っている。

- /ai/ が /ẹi/ になる。*oc.* fait "行い" に対し、*riv.* fèit である。なお、ガスコーニュ語では、hèit である。
- /ǫu/ が /au/ になる。*oc.* plòu "雨が降る" に対し、*riv.* plau である。
- /yǫ/ が /jǫ/ になる。*oc.* uòu "卵" に対し、*riv.* iòu である。
- /yẹ/ が /jẹ/ や /ẹ/ になる。*oc.* uelh "眼" に対し、*riv.* èlh、*oc.* nuèit "夜" に対し、*riv.* nièit である。
- /l/ が /λ/ に変る。*oc.* bèl "美しい" に対し、*riv.* bèlh である。なお、カタルニア語では bell である。

#### 1.1.2 ローヌ河岸方言

ローヌ河岸方言は、ミストラルに代表される19世紀のプロヴァンス・ルネサンスの言語であった。これはプロヴァンス方言の下位方言である。言語特徴は、Lafont(1972) による。

- 語末の閉鎖音は消失する。lop "狼" *oc.* /lup/ に対し、*rh.* /lu/ である。
- 語末の /n/ は発音される。bon "良い" *oc.* /bu/ に対し、bòn *rh.* /bǫn/ である。
- /yǫ/ は /jǫ/ になることもある。 *oc.* uòu に対し、*rh.* iòu である。
- /λ/ は /j/ になる。fuèlh "紙葉" *oc.* /fyẹ́λ/ に対し、*rh.* /fyẹ̀j/

### 1.2 音型ごとの記述

以下で分析するのは、$-\acute{V}\left\{\begin{matrix}C\\S\end{matrix}\right\}(a)\#$ の音型である。

この音型以外でワレが生じることは、ほとんどない。例外は、*riv.* fièbra "熱" であるが、これはフランス語の fièvre の影響とも考えられる。

これを除けば、*lat.* festa "祭日" > festa、*lat.* fortem "強い" > fòrt のように2重母音化は起らない。

また、最後の子音が、/p/ や /t/ の語で2重母音化が起っているものは、見つけられなかったので、以下で現われる表には加えていない。

#### 1.1.1 ę のワレ

オック語の2つの方言の他にフランス語、カタルニア語を加えて挙げる。下線を付けた語がワレたと考えられる語である。また、途中の横線の下が、硬口蓋音に続くものである。

| latin | français | rhodanien | rivelois | catalan |
|---|---|---|---|---|
| *beccum | bec | bèc | bèc | bec |
| meum | mien | mieu? | miu? | meu |
| grevem | grief | grèu | grèu | greu |
| *veculum | vieil | vièlh | vièlh | vell |
| pedica | piège | pietja | pietja | petja |
| despectum | dépit | despièch | despièit | despit |
| medium | mi | mieg | miège | mig |
| pretium | prix | pretz | prètz | preu |

focum > fuòc に対応する -ecum の語は見つけられなかった。また、bovum > buòu に対応する例では、ワレが起るのかが疑わしい。他の例でも *lat.* levem "軽い" > *rh.* lèu "速い" である。[5]2重母音化されたとも考えられる例は、*lat.* deum "神"> *rh.* dieu、*riv.* dius、*lat.* ego "私" > *rh./riv.* ieu がある。しかし、ローヌ河岸方言では、viure "生きる" が vieure となるように、/iu/ > /jeu/ であるため、deu > *diu > dieu のような変化も考えられる。

したがって、確かにワレが起るのは、-ti- に由来しない硬口蓋音の前のみである。

#### 1.1.2 ǫ のワレ

ǫ についても同様な表をつくると以下のようになる。

| latin | français | rhodanien | rivelois | catalan |
|---|---|---|---|---|
| floccum | floc | flòc | flòc | floc |
| focum | feu | fiòc | fòc | foc |
| locum | lieu | liòc | lòc | loc |
| bovum | bœuf | biòu | biòu | bou |
| ovum | œuf | iòu | iòu | ou |
| novum | neuf | nòu | nòu | nou |
| oculum | œil | uèlh | èlh | ull |
| noctem | nuit | nu'eit | nèch | nit |
| hodiem | ui | vèi | vèi | avui |
| folia | feuille | fuèlha | fèlha | fulla |
| foria | foire | fièra | fièra | fira |

pretium >prètz に対応する -otium の音型の語は見つけられなかった。

さて、ここで注目に値するのは、*lat.* locum "場所" > *riv.* lòc である。この方言の語頭では /l/ > /λ/ という変化が起るのが通例である。例えば、*lat.* locāre "置く" > logar > lhogar /λugá/ であり、これから派生した名詞 lòga "仕事" も lhòga のようになる。

また、調べた方言では /ǫu/ のワレは起らないものも多い。novum の他にも、*lat.* novem "9" > *rh.* nòu、*riv.* nau、*lat.* *plovit > *rh.* plòu、*riv.* plau *lat.* movit > *rh.* mòu、*riv.* mau のような例がある。

したがって、ワレが起るのは、硬口蓋音の前と、ローヌ河岸方言で 単子音による-c の前、条件が不明であるが、-u の前の一部の場合となる。

## 2. 仮説の提示と課題

### 2.1 以前の仮説への批判

伝統的な Schuchardt に始まる仮説では、[ę] > [ę:] > [ę́ę] > [íę]、[ǫ] > [ǫ:] > [ǫ́ǫ] > [úǫ] のように変化したとされている。[6] これには2つ問題点がある。

第一の問題点は、Posner(1996: 158) が指摘するように、なぜ強勢を持つ前半が高舌母音化されるかである。むしろ、強勢を持たない母音が、子音と同じようにコーダの位置で半母音化され、高舌化されることが予測される。かといって、後半に強勢を持たせることは、古フランス語でuo と u、ie と i がアソナンスすることに反する。そこで、La Chaussée(1989 : 31) のように最初の /i/ や /u/ がワタリの音に由来すると考える立場もあるが、これらが強い音なので強勢を持つようになるというのは説得的ではない。

第二の問題点は、ǫ に由来する2重母音の後半部分の音質の多様であることである。カステリア語など

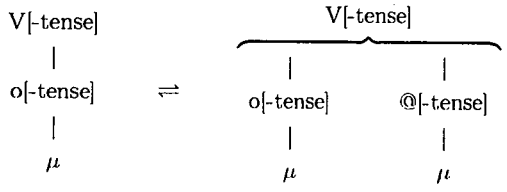
のように /ǫ/ > /we/ では、後半は /w/ との異化によって/e/ になったとされる。しかし、そうであれば、なぜ /ę/ > /jø/ のようになる方言を見つけることができないのであろうか。

### 2.2 新しい仮説

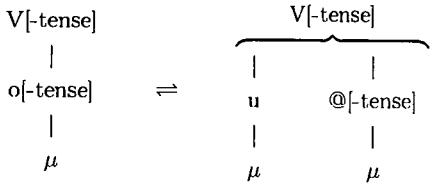
オック語のデータをもとに次のような仮説を提案する。この仮説は、Labov(1994: 252-255) が英語の同時代的な /æ/ の2重母音化、例えば、ある方言の話者の that /δæt/ は[δi:@t] であり、[7]他の方言の話者には the act のように聞こえる、からつくった仮説に近いが、/ę/、/ǫ/ を弛緩性音と考えること、言語変化をいくつかの競合する形からの選択と考える点が異なっている。

以下では、/ǫ/ の場合の図式を用いながら、仮説を説明していく。

最初の段階では、音声学的に長い /ę/、/ǫ/ にもう1つモーラが付加されることがある。そして、2つ目のモーラには /@/ が挿入される。重子音を持つ pretium > prètz、floccum > flòc では、この段階が阻害される。

(1)



この段階では *μ́μ* ⇌ *μμ́* であり、*μμ́* において *lat.* lĭnea “線” > */linja/ > linha と同様な変化により、前半の母音の高舌化が起ると考えられ、次のような式になる。

(2)



しかし、[@] が強勢をとるのは不自然なので、 /@́/ は他の音で実現されると考えられる。

プロパロキシトンのペヌルティマでは、大体 *lat.* orphanum “孤児” > *oc.* òrfe のようにどの母音でも e で書かれる母音に変化するので、[@] は /e/ に近いと考えられる。が、前後を鈍音に囲まれた環境では、*lat.* abilem “有能な” > *oc.* àvol のように変化する。

そこで、e[-tense] ⇌ @́ ⇌ o[-tense] と想定されて、次のような図式になる。

(3) a. o[-tense] ⇌ ú@ ⇌ { ué[-tense] / uó[-tense] }　　b. e[-tense] ⇌ í@ ⇌ ie[-tense]

右辺はそれぞれ /wę/、/wǫ/、/ję/ でもありうる。

この図式は、Rivel 方言で locum > *lhòc /λǫk/ が予想されるところで、lòc が現われるのを説明する。不安定なワレの前半の要素により、語頭の /l/ の口蓋化が阻害されたと考えられる。

ここで、直後に硬口蓋音を持つときは、/@/ が [ę] で実現されるのが促進されるので、平衡は右に傾く。条件を変えて何回か数値シミュレーションをしてみれば分るとおり、中辺から右辺への移行の確率が高く、右辺に留まる確率も高ければ、比較的小数の試行で右辺に存在する確率は1に近くなる。[8]つまり、/ę/ > /ję/、/ǫ/ > /wę/ という音韻変化が起ったのである。

bovem > buòu > biòu の場合やfocum > fuòc > fiòc の場合は類例が少いため、偶然なのか、それともこの形を取りやすいのかは明確ではない。しかし、いずれにせよこの考えの中に含めることができる。

そして最終段階は、おそらく*/mboxu/* > /y/ の変化によって母音の位置に余裕ができ、母音の弛緩性・緊張性の対立がなくなったことにより、(3) の中辺がなくなり、完全に音素が分離したのだと思われる。/u/ の前母音化にワレが先行すると考える理由は、hodium > uèi > vèi のような場合に /y/ > /v/ と考えるより、/w/ > /v/ と考える方が自然であること、bovem > buòu > biòu の場合に直接 /w/ > /j/ は考えにくく、/w/ > /y/ > /j/ と考えるべきであるからである。

### 2.3 新しい仮説の問題点と課題

この仮説には問題がないわけではない。

最大の弱点は、/@/ の存在が実証しにくいことである。Posner(1996: 159) によれば、今日の方言でも ę > [i@] となるものがあるが、多くの方言では [@] が現われない。上の仮説でも、可能な形の一つという位置付けなので、文字資料に特別な表記がない可能性が高い。何らかの間接的な証明を考えなければならない。

次の問題点は他の方言にも本当に適応可能か否か、ということである。例えば、oculum > uòlh となるような方言があるが、このような方言でも硬口蓋音の前でほぼ2重母音化がおこるのかどうかを調べなければならない。また、focum > fuèc のような方言での ǫ > /wǫ/、/wę/ の分布も調べる必要がある。

また、辞書数冊を全体を資料としても、集まった語数は少く、必要な音型で発見できないものも多い。そのため平行例をあまり見つけられず、偶然なのか、法則によるのかが判別ができない。

いずれにせよ、資料の拡大が今後の課題となる。

**【注】**

[1]ワレ(breaking/Brechung) という用語は、主にゲルマニストに使われている。例えば、古英語の *fehtan > feotan "戦う" などに対して使用される。また、Posner(1996: 159)は、veclum > *fr.* vieil について、この語を用いている。

[2]簡便のため必要がない限り、標準的な正書法で表記する。オック語については、特に断りがない場合は、オキシタニストの正書法を用いる。

なお、これらの例は、主にLausberg(1965: 227, 231-232) によるが、表記は変更したものがある。

[3]Lafont(1983: 29) によると、15から16世紀にかけて、開音節でも、閉音節でも、ǫ の2重母音化が起った。本考で扱うのは、これより前に起ったワレである。

[4]この対は、Barte(1988)から取った。恐らく前者は、フランス語からの借入語、後者が本来の語彙であろう。

[5]*riv.* lhèu /λęu/ からは判断できない。

[6]例えば、Lanly(1971: 23)。

[7]以下では、/@/をショワの記号の代りに使う。

[8]例えば、ę の場合で、右辺に留まる確率 99%、中辺に移る確率 1%、中辺から右辺に移る確率 98%、中辺に留まる確率 1%、 左辺に移る確率 1%、左辺から中辺に移る確率 1%、左辺に留まる確率 99% として、最初にすべて左辺にあるという初期条件のもとで実験すると、348回の試行で 95% が右辺にあることになる。十分な回数を行なうと、左辺に 1%、中辺に 1%、右辺に 98% になる。

**【参考文献】**


Alibert, Louis. 1993. *Dictionnaire occitan-français: selon les parlers languedociens*, Institut d'Estudis Occitans, Toulouse.

Barte, Roger. 1988. *Lexique occitan-français*, 3th ed., Collège d'Occitanie, Toulouse.

Bibliograf. 1994. *Catalan Dictionary*, Routlede, London.

Fourvière, Xavier de. 1975. *Lou Pichot tresor: Dictionnaire provençal-françaiset français-provençal*, Aubanel, Avignon.

Labov, William. 1994. *Principles of Linguistic Change: Internal Factors*, Blackwell, Oxford.

La Chaussée, François de. 1989. *Initiation à la phonétique historique de l'ancien français*, 2nd. ed., Klincksieck, Paris.

Lafont, Robèrt. 1972. *L'ortografia occitana: lo provençau*, Centre d'estudis occitans, Universitat de Monpelhièr III.

——. 1983. *Éléments de phonétique de l'occitan*, ≪Vent Terral≫, Enèrgas.

Lagarde, André. 1991a. *Le trésor des mots d'un village occitan*, 2nd ed., IEO.

—— 1991b. *Le trésor des mots d'un village occitan: Encara n'i a ...*, IEO.

Lanly, André. 1971. *Fiches de philologie française*, 4th ed., Bordas, Paris.

Lausberg, Heinrich. 1965. *Lingüística románica: Fonética*, Gredos, Madrid. Traduction of *Romanische Sprachwissenshaft*, 1963.

Morà, Pèir. 1994. *Diccionari occitan-francés: segon los parlars de Gasconha*, Princi Negre, Artigas.

Posner, Rebecca. 1996. *The Romance Languages*, Cambridge University Press.